

琵琶湖と有明海における水族資源の 伝統的利用と変容 ～その1 社会関係からみたヨシ帯～

藤村 美穂
武田 淳
牧野 厚史

佐賀大学農学部生物環境科学科

佐賀大学農学部生物環境科学科

琵琶湖博物館主任学芸員

1. はじめに

干潟（有明海）と内水面（琵琶湖）は、海と湖であり、生態系としては大きくことなるが、人間の活動という側面からみると共通点も多い。そのひとつが異なる生態系の出会う場としてのエコトーン（＝陸水の境界域）の利用である。本報では、エコトーンにおける人間の活動、とくに、エコトーン（とくにヨシ帯）をめぐる社会関係に注目して、特徴を述べておきたい。

有明海においても琵琶湖においても、エコトーンにはヨシが繁茂しており、周辺に住む人びとはそれを資源としてさまざまなかたちで利用してきた。共通するのは、屋根や葺簾のためのヨシの利用、ヨシ（注1）やヨシによってとどめられた泥の、田畑の肥料としての利用、そして、魚類の産卵地としてのヨシ帯それ自体の活用である。

さらに、ヨシ帯にみられるもうひとつの大きな共通点は、干拓しやすい場所であったということである。佐賀平野や筑後平野が、古くから続けられてきた干拓によって形成された平野であることは周知の事実である。琵琶湖においても、ヨシが生える湖辺、とくに内湖とよばれる湿地は、地先の村々によってすこしずつ干拓が続けられてきており、戦中の食糧難の時期には国の補助を受けて大規模な干拓が行われた。以下に述べるのは、琵琶湖北岸の岩熊集落の事例である。

2. 琵琶湖のヨシ帯の利用

岩熊（滋賀県伊香郡西浅井町）の地先にあった内湖は、ヨシ帯や漁場として利用される一方で、個人的に徐々に干拓されていたが、戦時中の食料増産計画の一環として昭和19年に全面的に干拓さ

れた（注2）。言伝えによると、往古は耕地であったものが陥没したために水面となったという。そのことを裏づける事実として、水中には柳の木や石の灯籠が沈んでいるのがみえたという。近世には港として利用されていたため、波よけのための石土堤が水中に積まれていた。土堤は、たびたびおこる洪水によって土が流出するのを防ぐためにも必要であり、上流から流れてくる泥を止めて陸地化し、耕地を広げるためにも必要であったといわれる。文政時代の絵地図には3本の土堤が描かれている。内湖は明治になるまでは隣接する塩津浜と共同で利用していたが、古くから岩熊のものだという意識はあった。明治になって官有地に編入されたため、岩熊へ払戻しするための裁判をおこしている。裁判では塩津浜の反対もあったが結局は岩熊の所有となった。明治時代までにも何度か内湖干拓が試みられたが資金不足のため実現せず、個人が地先を干拓して耕地を広げる程度であった。

当時の内湖の利用の様子は、聞き取りによると以下のとおりである。

3. 利用の実態と種類

かつての内湖は鮒や鯉、ギンギ、イサザ、ハイなどをはじめとする多種の魚類の他に、鴨や白鷺などの水鳥、そしてヨシやマコモなどの植物の宝庫であった。内湖の産物は、田畑の肥料（泥藻）として利用される他に、日々の食料や生活道具の材料（ヨシ）として利用されていた。田畑の肥料としては地先の岸辺に生えるマコモやススキや水草のほか、内湖の藻泥も利用された。屋根や簾の材料となるヨシは内湖の岸辺にも多かったが、内湖の中や石土堤の外側にもあった。ヨシ帯は単に

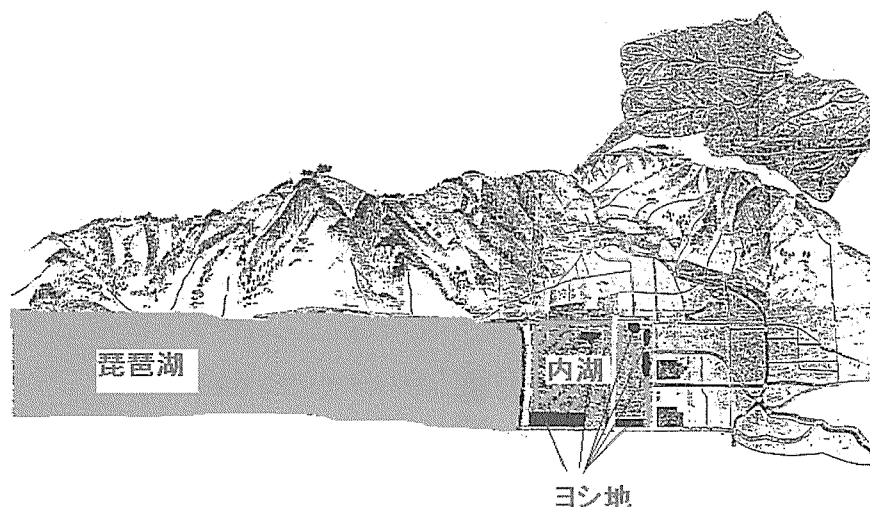


図-1 文政時代の絵図（筆者加工）

ヨシを刈って利用する場所であると同時に魚の産卵場所でもあり、また干拓して耕地化しやすい浅瀬でもあった。内湖の岸辺は個人による干拓を促進するため、大正3年に住民の各家に分譲されている。藻泥はよい肥料になるため、内湖から近い田にはよく利用された。夜にカーバイトランプやタモを持って、魚を取りに行くことも多かった。子供は小舟で菱や湖と田の境に並べられた杭につくタニシを取りに行ったり、水泳をして遊んだりした。内湖には、^{エリ}魼も2～3個あったという。

内湖には「ひだら船」（ひらた船）とよばれる小船が数艘あり、岩熊のものは誰でも使うことができたという。ひらた船については、それぞれの家ごとにみなが持っていたと言う者もある。いずれにしても、内湖は様々な活動を行なうために誰でも利用することができた。

4. 社会規制・管理

ヨシは、内湖の外にあるよく取れる場所は入札制になったこともあり、屋根を葺く者が入札した。その他の個人所有以外のヨシ帯については特にきまりはなかったが、いつも同じ人が刈っていたという。昭和初期は泥藻をとったり漁具を用いた漁を行うためには（塩津村への）鑑札が必要であった。鑑札は、小額を支払えば、誰でも簡単に持つことができた。塩津浜と岩熊の者が持っていたという。エリ漁をするのも村長（塩津村）の許可が必要であった。また魚は手や簡単な道具でつかめる程度の魚は自由にとることができた。県の条例によって5寸より小さい魚はとることを禁じられていたが、田の場合と同様、事実上は無視されていた。

財力（労働力）や力があり「むらに挨拶」をして村長（岩熊）の許可を得たものは（岩熊の住人なら）、琵琶湖を干拓して田を作ったという。一つの田でまとまった収穫を得るまでには10～20年かかる。干拓した田は、個人が利用した。

全面的な干拓は、第二次大戦の時に食料増産計画のひとつとして、国や県の補助を受けて行われた。干拓後の田の分配は、岩熊の住民を優先して一定量の労働を供出したものを買う権利（延べ25人分の労働で一反）が与えられた。干拓田を買った者は計56人で、ほとんどが岩熊の者であるが、塩津浜やその他の集落の者も4、5人ある。現在は干拓地独自の土地改良組合（法人）がある¹⁾。

ここで興味深いのは、ヨシ帯であった内湖の所有関係の変遷をみると、岩熊の人々のなかには「岩熊の土地は個人のものではなく岩熊全体のものだ」という感覚が潜んでいることがみてとれることである。たとえば、明治以降の近代的な所有法の考え方では、私有地は、個人の排他的な権利である。にもかかわらず、内湖の所有関係をみると、村が個人以上の発言力をもって、所有関係を規定していることがうかがえるのである。昭和26年に書かれた塩津内湖干拓沿革誌から内湖の所有関係をみると、内湖も法で定められた持ち分権に関係なく時々々の区の都合によって登記が変更されていることがわかる。

1 明治三十年頃には区有を一時官有になった事もあった

太政官令で三十二年頃岩熊に復旧した事もあった

重ねて国有水面となった

・同四十二年ころ時の区長****再三の陳情により大字岩熊へ無償交付

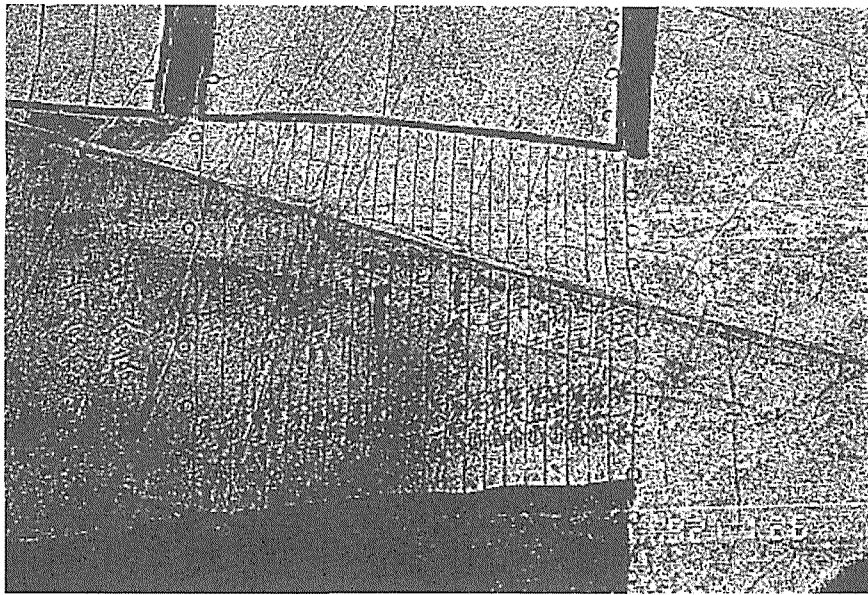


図-2 内湖の五畝割 (大正時代)

を受けた

- 1 大正三年頃大字岩熊住人に分割して約五畝歩を将来田に造成すべく私有として渡す
 - 1 昭和九年 造田放置のため住人の数人共有として登記した
 - 1 昭和十年 用田計画と共に水便による設計測量を県へ申請・・・種々協議して居る内に急変・・・依て助成金の少額のため申請却下願を出した 耕地整理組合を結成したまま時が流る
 - 1 昭和十三年 御国食糧確保のため塩津村更生計画の内容の中に九拾石三斗開田計画が県より指令もあった
- 昭和十八年八月十三日請入式

この感覚は近代所有制度が施行された今日でも人々の意識の中に生き続けているのである。この感覚にもとづいた所有形態は、総有という言葉で表現することができるかもしれない。村落研究のなかで、総有は次のように定義されている。

「各人には使用・用役権はあるけれども、管理所有権は、各人が共同に属する団体（共同体）にあるものをさす」²⁾。

「・・・ムラの土地は総有のもとにある。ムラ総有下にある土地は、単なる入会地や共有地のみでない。また道路、用水路のみではない。資本主義的社会の私的所有原則が貫徹しているかにみえる私的所有地においてもまたしかりである。・・・私有の根底にムラ人総体の所有が存在する。ムラの土地総体がムラ総体の所有なのである」³⁾。

このような慣習的な所有のあり方は、現在に至るまで琵琶湖岸各地に残っていることが報告されている。ヨシ帯は、生態系としての機能、あるいはその景観や利用の工夫においても注目されてきたが、所有という側面からみても、たいへん興味深い事例なのである。

5. 佐賀平野におけるヨシ帯

佐賀平野においては、ヨシ帯は沿岸部だけではなく、平野のなかにはりめぐらされた堀にも多かった。近年の筑後川の導水事業がはじまって伝統的な淡水（アオ）取水が行われなくなるまでは、農地改革によって形は崩れつつも、さまざまな時代の堀が並存して利用されてきた。これらの堀は、用排水路であつたばかりではなく、堀底に溜まった泥土を汲み上げれば水田の肥料になり、鮒や鯉をとれば冬場の重要な収入源あるいは蛋白源ともなった。そのため、かつては水をつかわない冬になると村で一斉に堀干しをし、泥や魚をとっていた。また、水辺のヨシや堀の周辺に植えられた柳は、山をもたない平野の村では炊き物の材料となった。このように、堀は、耕作や生活に欠かせない重要な地域資源であつたため、田の場所に応じて慣例的に決められた管理区域もあつたという。佐賀平野の堀の利用や所有関係については今回調査することができなかったが、琵琶湖との比較のうえてたいへん興味深い。

なお、まとめ、註釈および参考文献については「その3」で述べる。

■ 著者略歴



藤村 美穂

(ふじむら みほ)

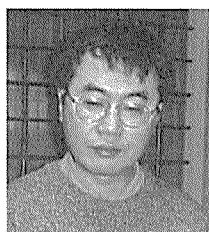
1996年 関西学院大学社会学研究課博士後期課程
単位取得後退学
1997年 佐賀大学農学部講師



武田 淳

(たけだ じゅん)

1974年 東京大学大学院理学系研究科博士課程（人類学
専攻）単位取得満期修了
1974年 琉球大学助手
1993年 兵庫県立人と自然の博物館・主任研究員
1997年 佐賀大学農学部教授



牧野 厚史

(まきの あつし)

1990年 関西学院大学社会学研究課博士後期課程
単位取得後退学
1999年 琵琶湖博物館 学芸技師
2005年 琵琶湖博物館 主任学芸員